

【優秀賞】

木天蓼、また旅

鎌田陽都（青森県 青森県立青森高等学校 2年生）

「小太郎は気楽だねー。好きな時に寝て、好きな時に外に出歩いて。羨ましいよ。どうせ私の苦労なんか、分かるもんですか」
 まるでカナタばかりが苦労をして、俺はなんの心労もない、とでも言っているかのような口ぶりに、俺は激しい怒りを覚えた。俺には俺なりに辛いことがあるのに、彼女はそれを分かろうともしない。

現に、彼女の発言に俺は大きな声で反論したのだが、軽く無視された。

きつとカナタは気づいていないのだ。俺が彼女の前から去るころが、どれほど大きいことなのかを。

だから俺は今朝、カナタが学校へ行く隙にこっそり家を抜け出した。もう帰らないつもりだった。

俺の苦労をわかってくれるどこかへ、俺の存在価値をわかってくれる誰かのところへ、俺は旅に出るのだ。

そう決意を固め、俺が大いなる一歩を踏み出してから徒歩三分。

「わー！ねこー！だっこさせてー！」

俺は隣の家の佐藤という女のところに住んでいる『悪魔』に、

捕獲された。

（くそがつ……この野郎！離れろ！俺は今から大いなる旅に出るんだぞ！）

しかし俺の声は悪魔には届かず、俺は全身をまさぐられた。

「ちよっと美香ダメじゃない！カナタちゃんの小太郎にいたずらしちゃー！」

とうとう俺のほっぺたを引っ張り始めた悪魔を、佐藤が止めてくれた。

（おお佐藤！助かった……でも、俺をカナタの物みたいにするのはやめろ！）

「えー！だつてママ、この猫ちゃんフワフワなんだよ！」

（悪魔が佐藤のことをママと呼んだ。この悪魔は佐藤の子供なのか？）

「でも、お散歩を邪魔しちゃダメよ」

佐藤はいい奴だ。いつも俺に優しい。

「小太郎くん、ごめんね。ほら、おやつあげるから許してあげて？……決して、いつもおやつをくれるから好きだ、などと言うことはない。俺は物には釣られない、決して。ああ決してだ。」

なんとかその場をやり過ぎし、俺は大いなる歩みを続けた。

ところが。

（ここは、どこだ）

日がまだ昇り切つてもいないところを見ると、いつもの散歩道からそれほど距離はないはずなのだ。しかし、すでにここは俺の知らない別世界になっていた。

（世界は広いものだ）

そんなことはどうでも良い。とにかく今重要なのは、（腹が減った！）

食べ物をどう調達するかということだ。選択肢は三つ。

一つ目は狩りをして鳥や鼠を捕まえる。しかしそれはいけない。そもそもこの街で俺より大きくない生き物といえば、

(カラスしかない)

奴らはまずそうなので却下だ。

二つ目は野良の餌場に行くこと。これには希望があった。

(俺のこの美しい黒の毛並みに見惚れて、きつと誰かが食べ物を譲ってくれるだろうからな！)

今日は運がいい。たまたま向こうに野良と思われる猫がいる。彼についていけば、場所がわからない俺でも餌場にたどり着けるだろう。

予想通り、彼は餌場に俺を連れていってくれた。

もたもたしていると空腹にやられてしまいそうだ。俺は餌場に着くや否や、自慢の黒毛を揺らして、ここぞとばかり俺の体を野良たちに見せつけた。言葉遣いもこの上なく紳士的に整える。

『やあみんな、はじめまして！すまないね、今ちょっと困っているんだ。よかったら、みんなの食べ物を少しばかり分けては……』

『なんだテメエいきなり。ぶちのめすぞ』

『ここは俺たちの餌場だ。怪我したくなきゃ、とつとと余所者は立ち去りな』

顔に傷のついたいかにも強そうな二匹がそう言った途端に、周りの野良猫たちが、一斉に俺めがけて飛びかかってきた。

『これはまずいだろ流石に……！』

俺は走って逃げようとするが、明らかに彼らの方が速い。

(あつ……終わつた)

俺は走るのをやめた。

(さよなら、俺の旅路)

ところが、いつまでたっても、爪が俺を襲うことも、俺の尻に大きな歯型ができることもなかった。

代わりに、俺の背後でとんでもなくおぞましい気配がする。恐る恐る振り返ると、

『お前ら。そんなカリカリしてねえで、譲ってやんな』

俺三匹分くらいありそうな、ドデカイトラ猫がそこにいた。

彼のおかげで、なんと俺は飯にありつくことができた。第三の手段としては考えていたが、人に媚びへつらうなどという屈辱を受けなくても良くなったと、俺はひとまず安心した。

『なあ、お前さんちよつといいか』

彼に呼ばれて、俺は驚きと恐怖で飛び上がった。

『別に取って食ったりしねえよ。ちよつと話し相手になつてもらいてえだけだ』

彼の後について、俺は薄暗い路地を歩いていった。

『こちら辺でいいか』

彼が立ち止まったのは、人気のない公園の、大きな管の中だった。

『さて早速だが、この老いぼれの質問に、答えてくれないか？』

『なんですか？』

俺としたことが、彼の気迫に押しされ、つい敬語を使ってしまった。

『気張らんでもいいさ。それより質問だ。お前さん、どうしてこんなところに来た？お前さんは、人間の家に住んでいただろう』

『……どうしてそれが！』

『バレバレだよ。お前さんには、首輪がついてるじゃあないか。なにに……名前は、小太郎と言うのか』

はつとして、俺は反射的に顔を隠した。もし俺が人間だったなら、今頃顔が真っ赤になっているのではないだろうか。

『まさか、家出した理由もお見通しというわけですか？』

『もちろん。お前さんのような奴は、飽きるほど見てきたからな。だがお前さんには不思議と、ちと興味がある』

『興味、ですか』

『ああ。そこだが、一つ提案がある！この老いばれも後生だ。どうだ？僕と一緒に旅に出てみないか？悪い誘いではないと思うが』

俺はまたしても驚いた。しかし、なかなか美味い話だと思った。彼女から少しでも離れることができそうだったからだ。

それに、カナタが旅行だ旅行だと言つて、沢山の水で満たされた場所や、真っ白な写真を見て喜ぶ度に、実は俺も、それがどんなところなのか気になって仕方がなかった。

しかし、その後は決まって、俺はカナタのシンセキの家に預けられてしまう。だからいつか、俺もその景色を、見てみたいと思つていた。

『ほほう、お前さん結構知りたがりだな？』

『まさか全部声に出た……？』

『どうだろうな？でも、興味があるところがあるならば、見に行つてみようじゃないか。どうせあてのない旅だ。気楽に行こう』
彼はその巨大で恐ろしい見た目に反して、気さくで親切な奴のようだ。

『自己紹介がまだだったな。僕の名は佐助だ。よろしくな』

サスケという名を聞いた時、俺はこそばゆい感じがした。しかし、その原因がさっぱりわからず、すぐにその感覚は消えた。

まず俺たちは、三日ほど歩いた。するとすぐに、沢山の水が張られた場所にたどり着いた。俺の見たかった場所の一つ目だ。

『この沢山の水を、人間は海と呼ぶ』

『海……』

海の周りとはとても静かで、時々水が折り重なって崩れる、ザザーンという音だけが聞こえてきた。佐助によれば、あの折り重なった水の流れは波というらしい。

海は広い。海を見ていると、俺の体がとてつもなくちっぴけに思えた。時折押し寄せる波に、呑み込まれてしまうのではないかという錯覚さえ覚えた。

海は、広がった。そして、美しかった。

その後、潮風を全身にたっぷり浴びた俺の自慢の黒い毛は、ゴワゴワになっていた。さらに風が冷たかったせいか、風邪を引きそうになった。佐助の言うことには、

『この寒くなる時期に海に行くというのも、なかなか酔狂なことだったな。まあよい経験だ』

次に行ったのは、と言つても、行ったというところ少しおかしなことになる。

俺たちはその時が来るのを海の近くの高台で待っていた。そして、その時は訪れた。

俺たちは高台に登り、その上からの景色を眺めた。

どんな絶景が待っているのかと思つたが、そこにはただ眩しい世界が広がっていただけだった。広大な海を見た後だったこともあり、俺は拍子抜けして大きなあくびをした。

『つまらないよな？』

『ええ』

『僕もだ。だが人間は、この景色を有難がるのさ。……人間は今時分の太陽を夕焼けと呼ぶ。とても熱く、とても美しいんだそう。あいにく、我々猫には見えない、赤という色らしい』

『赤……』

俺はもう一度景色を眺めた。

『赤、か。分らないな。人間なら、分かるのか?……カナタなら』

『寒い!』

俺は寢床からのっそり起き上がった。

あの日から長い月日が経った。沢山歩き、沢山のものを見てきた。

そして昨日、雪が降った。

俺はゆっくり立ち上がり、寢床から外に出た。

辺り一面が、真っ白になっていた。まさにあの写真のようだ。毛皮越しでも寒さは身にしみるが、ついにここまで見られたという達成感で、自然に気持ちは高揚していた。

『嬉しいか?小太郎』

『ああ』

『知らない間に、僕に対して敬語も使わなくなったな』

『……確かに』

『まあいいさ。小太郎、今日はお前さんに大事な話がある』

『なんだよ改まって』

『冗談めかして俺は佐助の方を向いた。』

佐助の顔は、真面目だった。

『まだ、旅を続けるか?』

突拍子もない彼の質問に、俺は笑った。

『当たり前だろ。これからどんどん寒くなるのは承知の上だ』

『そのことじゃない』

佐助はとても深刻そうに俺を見ていた。

『春になるまでには、とても長い年月がかかる。お前さんは、飼』

い主に二度と会えなくなるかもしれないぞ』

俺は一瞬、ドキッとした。だが、それは俺の旅を終える理由には

なり得ない。

『ケッ。あんな奴のところになんか、帰らなくなたって平気さ。あんな……俺のことをわかってくれない奴のところになんて』

『そうか』

佐助はとても寂しそうに笑った。

『愚問だったか。悪かったな。なんでこんなことを言ったかと言』

えは……僕も昔飼い猫だったからだ』

佐助が自分のことを話すのは、これが初めてだった。

『僕も昔、お前さんのように家を飛び出したことがあってな。何日も外で過ごした。だが僕の飼い主は僕を見つけてくれた。僕を、ずっと探してくれていたんだ』

いい思い出話だ、と俺は感じた。

『いい話だと思うか?』

『ああ』

『この話には、続きがある』

『?』

『僕のところへ走ってきた飼い主は……真っ黒で大きな車に跳ね飛ばされた。そして、そのまま別の白い車に運ばれてどこかへ行ってしまったんだよ。……家出なんぞしたことを後悔したが、その頃には飼い主の家の場所も忘れてしまっていた。どのみち帰ることもできなかつたんだ。仕方なくその場でずっと待ったが、あの人は、二度とそこに来ることはなかつた』

『……!』

『だから、お前さんには帰ってほしい。飼い主のいる場所を忘れないうちに。……飼い主が、生きているうちに』

『でも俺は』

『飼い主に反抗する気持ちはよく分かる。でも、本当は気づいて

いる筈だ。お前さんにとって、飼い主がどんな存在なのか」

「……！」

「どうやら俺は間違っていたらしい。カナタより優れている気でないながら、俺はいつもカナタのそばにいた。」

「小太郎？」

「頭の中に声が響いた。その声は、どこか懐かしい。」

「小太郎、なの？」

その声は何度でも呼びかけてくる。

「小太郎？……小太郎なら、返事して！」

しかし、その声は頭の中で響いているだけにしては少し違和感があった。やけに鮮やかで、やけに耳に残る。俺は辺りを見回して声の主を探した。後ろにいた。それは、

カナタだった。

カナタの目からは涙が溢れていた。いつもはやかましい彼女だが、泣くときだけは枯れ草のように弱々しく、俺は胸が締め付けられるのだ。だから、カナタが泣くときはいつも、

そばにすり寄ってやるのだ。

「……小太郎、なんだね」

「ああ」

通じないのはとづくにわかっていた。しかし俺は自然と答えていた。

「よかった……本当に、よかった……！」

突然、カナタは俺を強く抱きしめた。痛いくらいに苦しかったが、俺はそれを振りほどけなかった。

「ずっと、ずっと探して、もう会えないかと思って、本当にごめんね……小太郎はどうせ猫だから、なんて思って、ついあんなこと言っちゃった。ごめんね。最低だよね……私」

振りほどけるはずが、あるだろうか。

「さ、帰ろうか、小太郎」

カナタは俺をそっと地面に下ろした。

「待つてくれカナタ！あいつを、佐助を……あれ？」

ついさっきまでそこにいたはずの佐助の姿が、消えていた。

(佐助？)

その時、俺は思い出した。家の仏壇の脇にそっと置かれていた壺の存在と、壺のそばの木の板に刻まれていた名前を。

「佐助。お前の分まで、俺がしっかりカナタのこと、見てやるからな」

すると突然、カナタが立ち止まった。カナタの視線の先には、大きなトラ猫がいた。

「佐助？まさか、佐助なの？」

佐助はカナタの問いに答えるように、無邪気な声で鳴いた。

「にゃおん」

「やっぱり、佐助なんだね」

佐助はゆっくりと頷いた。そして後ろに振り返り、静かに消えていった。